

令和7年度
特選コース

第1回 入学試験問題
(2月1日 午前)

国語
(50分)

注意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都市大学等々力中学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

一 次の――線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、気宇壯大な計画。
- 2、今後の指針を求める。
- 3、イベントは予定通り挙行されます。
- 4、茶柱が立ったのは縁起がいい。
- 5、金の亡者。
- 6、旅行記をアラワす。
- 7、立派な行為にケイフクする。
- 8、水分がジヨウハツする。
- 9、祖父のイサンを相続する。
- 10、先生の家ホウモンが行われる。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

三月の初めに関東地方は何年ぶりかの大雪に見舞われ、なにもかもが白銀の世界に包まれた。すでに桜ヶ丘F.C.の六年生の活動は終了し、木暮はアパートの窓からぼんやりと雪景色を眺めて休日を過ごした。雪が積もると①無性にうれしかったのは、いつの頃までだったろうか。そんなことを、ふと、ひとりぼっちの部屋で思った。

その二週間後、桜ヶ丘F.C.の「六年生を送る会」が開かれた。去年より開花は幾分遅かったが、グラウンドを囲むように植えられた早咲きの桜は、花を咲かせ始めていた。

午前中は一年生から六年生までのすべてのクラブ員参加のミニサッカー大会。途中、父母会が用意してくれたカレーライスとフルーツポンチの昼食をはさんで、午後からは毎年恒例となっている六年生対クラブコーチでの「卒業試合」。試合前には、六年生チームの今日で最後となるチームユニフォーム姿での記念撮影が行なわれた。

試合に参加したクラブのコーチたちは、やわらかな春の日差しに汗ばみながら、グラウンドで対峙^{たいじ}して改めて子どもたちの成長ぶりを肌で感^②じた。卒業記念少年サッカー大会で強豪キッカーズを破ったチームは、1対2でコーチたちのチームに敗れたものの大人を本気にさせるまでの手ごわさをみせた。

コーチたちは卒団する選手たちに「A」とはしなかった。真剣に対戦することこそが、彼らを認めることであり、祝福になると思っていたのか、試合となればつい熱くなるサッカー好きの単なる性^{さが}だったのかはわからない。審判の試合終了を告げる笛が三回長く吹かれると、二つのチームはセンターサークルに歩み寄り握手を交わした。

試合後、校舎側のゴール前にクラブの子どもが集合し、六年生を送る式典の準備は整った。会場には選手たちの家族、それに元監督の峰岸^{みねざし}の姿もあった。ゴールポストの裏側、二本の桜のあいだに、公式戦の会場で使われる「ガッツだ! 桜ヶ丘FC」の空色に白く染めあげられた横断幕が張られていた。黒ぶちメガネの司会進行役の西牧会長が、やや緊張した面持ちでマイクを叩^{たた}いて調子を確認した。クラブの子どもたち、コーチ、保護者たちの前に、十三人の六年生たちが整列した。

まず、卒業までサッカーを続けた六年生全員に、一年生から手づくりの金メダルが贈られた。六年生ひとりひとりの前に、折り紙でつくられたメダルを持った一年生が、うれしそうに歩み寄る。背の高い尾崎は、身をかめてメダルを首にかけてもらい、一年生の小さな手と握手をした。彼らは、まだあどけない一年生たちのそれほど遠くない未来の姿なのだけれど、一年生と比べると、ずいぶんと大人びて見えた。

続いて来年度最高学年となる五年生たちが前に出て、クラブからの記念品としてチームの集合写真のパネルを手渡した。その返礼として、秋の運動会で応援団長を務めたゴールキーパーのオッサこと長内陽介^{おさなひ}の音頭で、クラブに残る後輩たちにエールが送られた。グラウンドを見おろすように建っている四階建ての校舎に声援はこだまし、不意に飛び立つ白い鳩^{はと}の群れのように拍手が湧^わいた。式の空気は和み^{なご}、緊張の緩^{ゆる}んだ六年生たちの顔にも笑みが浮かんだ。

卒業後、地元のJリーグのジュニアユースチームに進むことに決まったキャプテンの星川が、チームを代表して感謝の言葉を述べた。

「ぼくたちがこの桜ヶ丘FCで思いっきりサッカーをやれたのは、多くのコーチやお父さんお母さんたちのおかげです。ぼくらのチームは、なかなか試合にも勝てず、チームでひとつもメダルを取れず、あまりみんなを喜ばせることはできませんでした。でも、ぼくたちに悔いはありません。サッカーを「B」ことができました。本当にありがとうございました」

星川の言葉は最後までしっかりとっていた。

拍手が湧き起こる。

西牧コーチは黒ぶちメガネの奥で目をしょぼつかせていた。

山崎コーチは、人目もはばからず指を目に当てて泣いていた。

峰岸の瞳にも光るものがあつた。

そして、六年生キャプテンの星川から、次期最高学年チームのキャプテン候補に、この式典だけに使われるキャプテンマークの引き継ぎが行なわれた。伝統のボロボロになったトリコロールのキャプテンマークを五年生チームのキャプテンは受け取った。

「まずは、卒業、おめでとう」

監督の木暮が選手の前に立ち最後の話を始めた。

「今日でこのチームは解散する。でも、君たちのサッカーは終わったわけじゃない。あるいは、君たちの中で、サッカーをやめてしまう者もいるかもしれない。それは、それでいい。自分で決めるべきことだ。それでも、このクラブでサッカーと一緒にやってきたことは、心に生き続けるはずだ。」

ただ、ここに宣言するけど、おれはサッカーをやめない。**ア**もう四十一歳で、速くは走れないし、足ももつれる。昔のようにはいかない。かっこよく見えないかもしれない。でも、続けるよ……」

木暮は選手たちを見渡した。「おれは今までサッカーでたくさんのことを学んだ。それにまだまだうまくなりたいたい。サッカーは、年齢や体力でするものじゃない、ハートでするものだと思うから……。なにかに夢中になることは、捨てたものじゃない。**イ**それを口にすることは簡単なことだ。

自分はサッカーを通じて、多くの仲間と出会ってきた。**ウ**君たちともこうして知り合えた。**③**君たちは、まだサッカーをほんの少しかじったに過ぎない。これからサッカーを続ければ、サッカーの美しさや、厳しさや、醜みにくさや、もつともつと新しい発見をするだろう。できれば君たちのサッカーの続きを見てみたい。**エ**時間があれば、ぜひ君たちのグラウンドにも足を運び応援したい。

最後に私をサポートしてくれた西牧コーチ、山崎コーチ、保護者の皆さん、そして、私にチャンスを与えてくれた前監督の峰岸さんに感謝します。選手の皆さんは、なにか壁にぶつかったり悩んだりしたら、いつでもこのグラウンドに帰ってきてください。きっとコーチや後輩たちが君たちを温かく迎えてくれるはずです。このチームを離れてユニフォームの色が変わっても、このチームのことを忘れないでください。一緒にプレーした仲間は、いつまでもチームメイトだから。おれもいつまでも君たちのコーチにいる。そして、いつまでも、**④**サッカー小僧の気持ちを忘れないでいたい。君たちとサッカーができて幸せだった。最高のチームでした。いつか、また、このグラウンドで会いましょう」

木暮が一礼をすると、「かつこいいぞ監督！」とオッサが小声で冷やかした。

保護者たちから、どっと笑い声が起こった。

星川は唇をかみ締めていた。

遼りょうすけ介は微笑みながらまっすぐ前を見ていた。

尾崎はそ知らぬ顔をしながら頬ほおを紅潮させていた。

みんないい顔をしていた。

それは、桜の花の咲く頃になるたびに、このグラウンドで繰り返されている風景だった。

木暮は想っていた。監督として最高のゲームだったのは、結果は負けてしまったけれど、あの最後の試合だったと。あの日、木暮は長年コーチをやってきて、一度やってみたいと思っていた試みを遂に実行した。それは、言ってみれば、^⑤子どもたちにサッカーを返すことだった。

試合前に木暮は選手たちに言った。「この試合は、すべて自分たちで戦ってみろ。おれはなにも指示は出さない。メンバーも自分たちで決めてみろ」

木暮はベンチからなにひとつグラウンドの選手たちに指示をしなかった。一切声を上げることもなく、彼らのサッカーを見つめていた。唯一選手交代だけを行い、すべての選手をグラウンドに送り出した。

木暮はベンチで彼らのサッカーを楽しむことさえできた。素晴らしいプレーには声をかけた。選手たちは自分たちで考え、自分たちでゲームの責任を負い、自分たちで戦ってくれた。あれが自分にとって最高の采配^{さいはい}だった。なにもしないということが……。それでも彼らは立派に戦い抜いた。

「六年生チームは、最後の円陣を組んでください」

西牧会長がマイクを使わずに叫んだ。

多くのクラブ員やコーチ、保護者の前で、選手たちは円陣を組むと、その中で顔を見合わせた。

星川、オッサ、樽井^{たるい}、シゲ、浅野、湯川、中津川、和樹、沢村^{たくみ}、巧、哲也、尾崎、そして遼介。

みんな笑っていた。

遼介は星川と目が合った。遼介がうなずくと、星川もうなずいた。

「いいか、さいごだからな、大きな声を出せよ！」

星川がチームメイトの顔を見る。

「叫べよ！」

遼介が気合を入れる。

「いいな……いくぞ」

みんながうなずく。

一瞬、星川の肩が沈み、それに引きずられるように円陣が沈む。そして、あの魔法の言葉が放たれた。

「エンジョーイー！」
「フットボール！」

(はらだ みずき「サッカーボーイズ再会のグラウンド」より)

(注)「対峙」……真正面から向き合うこと。

問 一、——線①「無性に」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、ますます イ、おもむろに ウ、いつも エ、むやみに

問 二、——線②「感じた」の主語を答えなさい。

問 三、Aにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、花を持たせよう イ、顔に泥を塗ろう ウ、煮え湯を飲ませよう エ、鼻を明かそう

問 四、Bにあてはまる言葉を文章中から三字で探し、抜き出して答えなさい。

問 五、――線③「君たちは、まだサッカーをほんの少しかじったに過ぎない」とありますが、木暮監督がこうに言ったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、六年生たちは、上の学校でまだサッカーを続けるから。

イ、六年生たちは、サッカーの奥深さをまだ知らないから。

ウ、六年生たちは、サッカー初心者と変わらない技術レベルだから。

エ、六年生たちは、サッカーに生活の全てをかけているわけではないから。

問 六、――線④「サッカー小僧の気持ち」とありますが、具体的にはどのようなことですか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から三字で探し、抜き出して答えなさい。

サッカーに対する思いを大事にし、三字 なんてプレーすること。

問 七、――線⑤「子どもたちにサッカーを返す」とありますが、具体的にはどうすることですか。文章中の言葉を使って四十字以内で答えなさい。

問 八、文章中には、次の一文が抜けています。この文を入れるべき最も適当な箇所を文章中のア～エから選び、記号で答えなさい。解答には□を付けず、ア～エの記号で答えること。

人生には、あきらめることの言い訳がいくらでもころがっている。

問 九、この文章の内容にあてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、「卒業試合」で、六年生チームはコーチチームに敗れたが、強豪キッカーズを破った实力を見せた。

イ、監督の木暮は卒団式で、向上心を持ってサッカーを続けていくことを宣言した。

ウ、監督の木暮は、サッカーを通じて多くの仲間と出会えることが一番大切だと考えている。

エ、「エンジョーイー!」「フットボール!」は魔法の言葉であり、チームの士気を高める効果を持っている。

問題は次ページに続きます。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

パソコン通信の時代から、ネットワーク上でのやりとりにはトラブルがつきものでした。その要因の一つは、それがまさに対面ではない、文字だけのコミュニケーションだったという点に求められるでしょう。

対面でのコミュニケーションの場合、その参加者にはお互いの「面目」を守ろうとする傾向があります。自分の①面目を守るだけではなく、相手の面目をつぶさないように心がけるといことです。相手の面目をつぶすことに躊躇^{ちゅうちよ}しないと、周囲の人びとからの評価が下がってしまうことになりかねないからです。

とはいえ、それでも意見が食い違うなどの理由で、そのままではお互いの面目を保つのが難しい状況に陥^{おちい}ることがあります。そこで用いられる方法の一つが「なあなあ」で済ませるというやり方です。A、意見が食い違っていたとしても、表面的にはなんとなく合意しているかのようにふるまうということです。

対面でのコミュニケーションでそれがやりやすいのは、記録や録音をしない限り、発せられた言葉は跡形もなく消えてしまうからです。残っていないからこそ、なんとなく意見が一致しているかのようにみせかけやすいのです。私自身、人と話をしている「この人とは意見が合わないな」と内心では思っても、あたかも腹の底から同意しているかのようにふるまうことがときどきあります。

ところが、ネットワーク上で見ず知らずの相手とやりとりする場合、相手の面目を保たねばならないという意識はどうしても低くなります。相手を完膚^{かんぷ}なきまでに叩^{たた}きのめすと、ギャラリーのひんしゆくを①どころか、称賛^{しょうさん}されることも少なくありません。

しかも、文字によるコミュニケーションでは、それぞれが何を書いたのかが目にみえるかたちで残っていますし、それぞれの主張を支える論理もより明確になりがちです。口頭では「なあなあ」で済ませられるかもしれない意見の食い違いが、文字だけのコミュニケーションではそれぞれの論理が②に、より明確に浮かび上がるために、落としどころがどこにも見出せなくなってしまうのです。

(中略)

世の中には論理の次元ではどう頑張っても和解できない対立が存在しています。それぞれの主張を支える道徳観が根本から食い違っているからです。

そうした状況でも妥協^{たきようてん}点を探ろうとするなら、論理的、抽象的な次元での話をいったん脇^{わき}に置いて、対立する双方ががらうじて我慢できるポイントを実務的、具体的に探する必要があります。文字だけのコミュニケーションによって論理の次元で戦い続けたとしても、そうしたポイントに到達できる可能性はきわめて低いと言わざるをえません。

また、文字だけのコミュニケーションは、内容以外の情報がきわめて乏しいのが特徴です。相手が怒っているのか、悲しんでいるのか、別にそれほどでもないのかがわかりにくいのです（メールの顔文字は、そういった情報の乏しさを補うための手段です）。そのため、関係がいったんこじれ始めると、相手からの返信が実際以上に攻撃的なものに見える可能性が跳ね上がります。昔から「メールで喧嘩けんかになった場合、直接に会わないと仲直りできない」と言われるのですが、^②そのあたりに原因がありそうです。

さらには、「他人の目に入るところに意見を書く」という行為が生み出す問題もあります。世の中には自分の意見の一貫性を全く気にしない人もいますが、とりわけ人目につくところに書かれた言葉は、それを書いた人間を強く拘束こうそくしがちです。

意見を書いていなければ、または書いたとしても日記のように他人の目にさらされないところであれば、後にその意見を変えることに大きな制約はありません。^③**B**、人目のあるところに意見を書き、後にそれを変えることになれば、かつての自分が誤っていたことを人前で認めねばなりません。これはとりわけ、自分の意見にプライドをもつ人であればあるほど難しくなります。

したがって、最初は軽い気持ちで、あるいは「ネタ」として書いたことであっても、引っ込みがつかなくなることや、自分で書いた言葉を読み返すうちに自分自身を説得してしまう可能性が生じるようになります。「自分は絶対に正しい」という理屈りくつを次々に生み出し、それによって自らの立場を固めていくことになりうるのです。結果として、^④何がなんでも自分の非を認められない、「謝ったら死ぬ」状態に陥ることにもなりかねません。

（中略）

新聞やラジオ、テレビなどを介した、いわゆる「^⑤マス・コミュニケーション」の場合、情報を発信する側は、新聞社やテレビ局のように、ある程度の大きさになるのが一般的です。しかも、それらが発したメッセージを受け取る人びとの数はそれに輪をかけて多く、数億人に達することすらあります。また、発信側と受信側が入れ替わる可能性はかなり低く、一方向的な情報発信がメインになります。

他方、電話での通話の場合、一対一のやりとりが基本になります。^⑥「パーソナル・コミュニケーション」と呼ばれるゆえんです。また、一方が果てしなく話し続け、他方が一言も発さずにそれを聞き続けるという状況もなくはないでしょうが、電話では話す側と聞く側が頻繁ひんぱんに入れ替わるのが一般的でしょう。ただし、余談ではありますが、電話は対話のためのメディアとして登場したのではなく、当初は音楽や演劇、教会のミサミサを一方向的に発信する手段として用いられていました。

C、このようなコミュニケーションの規模の違いは、発信されるメッセージの性格にも影響を与えます。数百万、数千万の人間が視聴するテレビでの発言は、それだけ^⑦3な性格を帯びやすくなります。もちろん、番組ジャンルによってもその程度には違いがあり、ニュースや討論番組に比べれば、バラエティ番組での発言は軽い扱いになります。他方、電話でのやりとりは通常、プライベートなものとされ、相手にもよるとはいえ気楽な発言がはるかに許容されやすくなります。

これらマス・コミュニケーションおよびパーソナル・コミュニケーションと比較した場合、インターネットでのコミュニケーションの特徴は、その多様性と流動性にあると言えます。まず、メッセージを発信する側の規模は、マスメディアの公式サイト(注7)のようになりかなりの人数であることもあれば、個人ブログ(注8)のように一人であることもあります。メッセージを受け取る側の数も、数千万から数億人に達することもあれば、数人のこともあり、誰にも届いていない可能性すらあります。

D、当初は数人にしかみられていなかったメッセージが、何かのはずみに突如(とつと)として数十万、数百万のユーザーに届くといった事態もあります。哲学者の戸谷洋志(注9)の表現を借りるなら「^⑥友達と一緒に公園でサッカーをプレーしていたはずなのに、何かの魔法によって突然、満員のスタジアムにワープさせられたような状況」が生じうるのです。

(津田 正太郎「ネットはなぜいつも採もめているのか」より)

(注1)「ネットワーク」……離れた場所にあるコンピュータ同士を通信技術でつないで、画面上で情報のやりとりができるようになっていく状態。

(注2)「躊躇」……ためらって歯止はどめをかけること。

(注3)「完膚なきまでに」……無傷のところが無いほど徹底的に。

(注4)「ギャラリー」……ここでは自分と相手のやり取りをネット上で見ている部外者のこと。

(注5)「介した」……間にはさんだ、通した。

(注6)「ミサ」……キリスト教徒が教会に集まって祝ったり祈ったりする儀式(ぎしき)。

(注7)「サイト」……インターネット上の特定の情報を与えるページのこと。

(注8)「ブログ」……インターネット上で個人の日記などを掲載するページのこと。

(注9)「ワープ」……ある場所からある場所へ瞬間移動すること。

問 一、——線①「面目を守る」とありますが、それについて筆者はどのように述べていますか。適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、対面でのコミュニケーションでは、発せられた言葉は消えるため、互いの面目を守りやすい。

イ、対面でのコミュニケーションでは、面目を守る方法として「なあなあ」で済ませるやり方がある。

ウ、文字だけのコミュニケーションでは、見ず知らずの相手とやり取りする場合、相手の面目を守る意識は低下する。

エ、文字だけのコミュニケーションでは、主張を支える論理が不明確になりやすく、相手の面目を守りにくくなる。

問 二、

A

D

 にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、A—しかも B—そして C—さて D—つまり

イ、A—しかも B—あるいは C—そして D—つまり

ウ、A—つまり B—ところが C—さて D—しかも

エ、A—つまり B—ところが C—そして D—しかも

問 三、

1

 にあてはまる二字をいれて、慣用句を完成させなさい。

問 四、

2

 ・

3

 にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、印象的 イ、一方向的 ウ、可視的 エ、挑発的 オ、公的

問 五、——線②「そのあたり」とありますが、「その」の内容を具体的に表している部分を文章中から四十字以内で探し、最初と最後の三字を抜き出して答えなさい。

問 六、——線③「何がなんでも自分の非を認められない、『謝ったら死ぬ』状態に陥る」とありますが、それはどのようなことがきっかけで引き起こされますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、内容以外の情報がきわめて乏しいこと。
- イ、他人の目に入るところに意見を書くこと。
- ウ、自分の意見にプライドをもつこと。
- エ、自らの立場を固めていくこと。

問 七、——線④「マス・コミュニケーション」とありますが、それはどのような場面で成立しますか。適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、街中にある巨大広告を見たとき。
- イ、街頭で行われる演説を聞いたとき。
- ウ、コンビニで売られている雑誌を読んだとき。
- エ、非対面での会議に参加したとき。

問 八、——線⑤「パーソナル・コミュニケーション」とありますが、それはどのようなものですか。「多くの人」・「やりとり」という言葉を使って三十五字以内で答えなさい。

問 九、——線⑥「友達と一緒に公園でサッカーをプレーしていたはずなのに、何かの魔法によって突然、満員のスタジアムにワープさせられたような状況」とありますが、これはインターネットのコミュニケーションのどのような特徴をたとえた表現ですか。その特徴を文章の中から七字で探し、抜き出して答えなさい。

問 十、この文章で述べられている内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、パソコン通信の時代になり、ネットワーク上でのやりとりではトラブルが少なく、文字だけのコミュニケーションであっても充実したものとなった。

イ、論理の次元においては、それぞれの主張を支える道徳観が根本的に食い違っている場合、どう頑張っても和解できない対立がある。

ウ、文字だけのコミュニケーションにおいて、メールの顔文字はそのコミュニケーションで必要な情報を不明確にするため、使用しないほうがよい。

エ、コミュニケーションの規模の違いは、発信されるメッセージの性格には影響を与えず、発信者の意図は形を変えることなく人々に伝わっていく。

④ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、文章中の①～⑥は形式段落の番号を示しています。

① もしも宇宙人がいまの地球を見たら、人類とは何とも不思議な生き物だと思うに違いない。捨てるほどの食料があっても、飢餓に苦しむ人がいる。互いに争い、傷つけあう。さらに言えば、遠くを見る目があるのに、Aを向いて歩き、ぶつかりあっている。

② 目の前の人をよけるより、大事なことってなんですか？――。少し前、近所の駅でそんな標語を見た。①「歩きスマホ」による事故は相変わらず絶えないらしい。東京消防庁の管内では、過去5年間に158人が救急搬送されたという。年代別では50代がトップだとか。

③ 中国語では「低頭族」とも呼ばれる。頭を下げ、スマホに見入る人たちを揶揄する言葉だ。かつて皇帝に謁見する際、②「三跪九叩頭の礼」を求めた国である。②現代の皇帝はスマホなのだとの痛烈な皮肉さえ感じられる。

④ そもそも不器用な筆者は、歩きスマホをしようにもできない。文字を打ちながら、スイスイと歩く人には脱帽である。どこかに別の目があるのか。はてさて人類は新たな進化をとげたのか。③そんな冗談も言いたくなる。

⑤ 一刻を争って見なければならぬ画面など、めったにあるまい。なぜスマホを見続けるのか。おそらくそこには、歴々の哲学者たちを悩ませてきた「退屈」という問題があるのだろう。

⑥ かの李白は詠んだ。〈頭を挙げて山月を望み、頭を低れて故郷を思う〉。しばしスマホをカバンにしまい、わが町を眺めてみたい。春風やさしく、桜の花も咲き始めている。Bを向いて、歩こう。

(朝日新聞「天声人語」より)

(注1)「揶揄」……対象をからかって面白おかしくあつかうこと。

(注2)「三跪九叩頭の礼」……中国清朝の皇帝に対する拝礼方式。三回ひざまずき、そのつど三回、合計九回頭を地面にこすりつける。

(注3)「李白」……中国、盛唐期を代表する詩人。七〇一年～七六二年。

問 一、A・B には、対になる言葉があてはまります。その言葉を漢字一字で考えてそれぞれ答えなさい。

問 二、——線①『歩きスマホ』とありますが、筆者は「歩きスマホ」についてどのように考えていますか。そのことを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から四字で探し、抜き出して答えなさい。

一刻を争って確認しなければならないほど大事なことがあるわけではなく、四字な時間を作りたくなくて、いつでもどこでも何となくスマホを見てしまうのだろう。

問 三、——線②「現代の皇帝はスマホなのだ」とありますが、これはどのようなことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、昔の人々が皇帝の命令に従って行動していたように、現代の人々はスマホを操作しているようで実はスマホに動かされているということ。

イ、昔の人々が皇帝に対して礼儀を欠かさなかったように、現代の人々はスマホではなく目の前にいる人への礼儀を徹底するべきであるということ。

ウ、昔の人々にとって皇帝が偉大な存在であったのと同じように、現代の人々はスマホに対してもっとやまう気持ちを表さなければならぬということ。

エ、昔の人々にとって皇帝が絶対的な存在であったのと同じように、現代の人々にとってはスマホが何よりも重要な存在になっているということ。

問 四、——線③「そんな冗談」とありますが、どのような「冗談」ですか。その内容にあたる部分を文章中から一つづきの二文で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問 五、この文章の構成として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

エ、	ウ、	イ、	ア、
1	1	1	1
/	2	/	2
2	/	2	/
3	3	3	3
/	4	4	4
4	/	/	5
5	5	5	/
6	6	6	6

四

五	四	三	二	一

三

十	九	八	七	六	五	四	三	二	一
						3	2		

二

九	八	七	六	五	四	三	二	一

一

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1

〈受験生はこれより上段には記入しないこと〉

四

問一

A

B

問二

問三

問四

問五

問九

問八

問七

問五

問六

問十

三

問一

最初

最後

問二

問三

問四

2

3

問八

問九

問七

問六

問五

二

問一

問二

問三

問四

問五

問六

一

6	1
す	アラワ（す）
7	2
す	ケイフク
8	3
す	ジョウハツ
9	4
す	イサン
10	5
す	ホウモン

気

字

指

針

挙

行

茶

柱

亡

者

注意事項
・解答は解答欄の枠内に濃くはっきりと記入して下さい。
・解答欄以外の部分には何も書かないで下さい。

氏 名

受験番号

0	0	0	0
1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9

評価点

令和7年度 特選コース
第1回 中学校入学試験問題 〔国語〕 解答用紙（2月1日午前）